

東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設有識者会議（第1回）議事録

○日 時：平成27年4月30日（木）13:30～15:25

○場 所：杉妻会館 4階 牡丹の間

○出席者：別紙出席者名簿のとおり

○要 旨：以下のとおり

1 開 会

2 文化スポーツ局長あいさつ

篠木文化スポーツ局長からあいさつ。

3 委員紹介

事務局から各委員を紹介。

4 設置目的等

事務局から、会議の設置目的、イノベーション・コースト構想における動きなど、今までの経緯、会議のスケジュール等を説明。

5 正副会長選任

会長に小沢委員、副会長に馬場委員を選任。

6 議 事

(1) 施設の基本理念について

(2) 施設の機能と具体的な内容について

上記議事について一括して協議。

(事務局)

資料1から資料4-2及び参考資料に基づき、概要を説明。

(澤田委員)

別紙資料に基づき「中越メモリアル回廊」について説明。

- ・中越メモリアル回廊は、地域をそのまま保管庫とする試みである。4施設3公園から構成されており、各地域で発信したいと考える情報が異なることから、各々多様性を尊重し、施設の内容はそれぞれの自主性に委ねられている。
- ・他県の施設と異なり、中山間地域振興の観点を重視している。

- ・当該施設のみを目的に来訪するのではなく、それぞれの施設を巡る観光ルートに組み込まれている。
- ・他県においても同様であるが、被災時から施設が開館するまでの間は、住民感情の問題もあり、相応の時間を要しているのが一般的である。
- ・被災の展示が外部の人にインパクトを与える期間は短い。その後、地域の人に向けて何ができるかを考える必要がある。
- ・福島の場合は、中越と抱えているものの質が違い、国との関わりも異なっている。

(藤沢委員)

- ・長期に渡る復興途上にあっては今後の復興を担う人材が必要であり、また、復興には企業やNPOの参加が不可欠である。よって、基本理念に「復興支援の担い手の人材育成」及び「企業、NPOとの連携」を柱（ミッション）に加えることを提案したい。
- ・地域との関係が大切であり、地域との連携も柱（ミッション）に加えることを提案したい。
- ・展示においては、企業や非営利セクターと復興への関与、海外からの支援、双葉の伝統文化や産業についての記録も展示すべきである。
- ・来訪しにくい場所に設置することも考えられるので、情報発信の仕方を工夫することが重要である。また、広報担当を置く必要もある。

(馬場委員)

- ・津波災害に原子力災害が加わり、被災者の捜索もままならず、被災状況は非常に悲劇的なものであった。一方、私どもの海沿いの小学校では日頃からの訓練の成果もあり犠牲者を一人も出さなかったという奇跡があった。また、復興の軌跡に着目することも大事な視点であり、これら悲劇と二つの「きせき」（奇跡、軌跡）を施設に取り入れるべきであると考えます。
- ・中越メモリアル回廊の「おらたる」のような、地域再生につなげる視点も大切である。
- ・施設については、犠牲者の記録を残すべきであり、追悼・供養の場としての復興祈念公園の近くに設置し、被災及び復興の状況を全国に向かって発信する必要がある。

(中田委員)

- ・中越の場合と異なり、原子力災害を伴う複合型災害であり、住民の生活基盤を再度元の土地に回復できるのかという悩みもある状況の下で、どのように

施設を造るのかという問題がある。

- ・施設を造っていくプロセスが地域コミュニティの再生につながるよう大いに期待したい。また、暮らしの場を取り戻せていない被災地の人々が、施設設置のプロセスにどう関与することができるのかにも注目したい。
- ・風評被害は多方面に影響を与えている。科学的な対応だけでなく、社会科学的な対応も重要である。施設において県内における風評被害払拭の努力などを見せることにより、全国の人々とお互いに共感しあえる場、お互いに学びあえる場、成人が学び直す場となることを願う。
- ・教訓等について、次世代へ継承することや全国の人々と共有することも考慮して、「双葉郡教育復興ビジョン」における「ふるさと創造学」との連携も重要である。

(圖師委員)

- ・様々な機関が様々な情報を持っているので、連携していくことが大切である。
- ・時間が経過し情報の散逸が懸念される中でどのように情報を集めるか、また、状況が変化していく中で復興過程をどのように残していくかが大切である。
- ・施設を造って見てもらうだけではなく、能動的に発信していくことも大切である。どのような情報をどのような方法で誰を対象としていくかでやり方が変わっていく。

(澤田委員)

- ・遺族感情や生活再建の見通しなど、様々な問題が落ち着くまでには時間がかかるので、急いで造る性格のものではないと思う。他の事例を見ても、被災時から施設の開館までは、相応の時間がかかっている。ただし、施設設置の話が自然消滅してしまわないよう、議論を継続させる必要はある。
- ・複合型災害であるゆえに、模範は様々なところに求めるとよい。神戸の人と防災未来センターだけではなく、雲仙普賢岳や有珠山の噴火災害、奥尻島地震、また、水俣病のような公害による被害の事例も参考事例になる。
- ・次世代の研究者を育成する機能を持たせることを是非検討してほしい。

(門脇委員)

- ・県外からの教育旅行で見られることであるが、一人でも反対者がいると本県への来訪が忌避される事例がある。このことから、情報発信の重要性を痛感している。
- ・後世に伝える他から見学に来てもらえるような施設にする必要がある。
- ・観光の要素を持たせる一方で、施設の設置については被災地の人々の理解を

得る必要がある。

(小沢委員)

- ・今まで様々な施設を見学してきたが、アウシュビッツの展示の仕方はインパクトがある。余計な装飾をせず、ひたすら事実のみを淡々と語ることで来訪者に何かを強く訴えかけてくるものがある。
- ・風評からは、物事のとらえ方について、理性的な側面と感性的な側面の違いがあることが見て取れる。リスクコミュニケーションや科学理解的な視点からの取り組みを行うことが重要である。
- ・施設については、科学の正負の両面を理解する場になればと思う。

(藤沢委員)

- ・本日の各委員の意見を聞き、施設整備というとハード面にばかり目が行きがちであるがソフト面も重要であることを改めて認識できた。
- ・今後、被災地とのつながりについて議論したい。

(馬場委員)

- ・未だに原子力災害は収束しておらず、双葉郡の半分は避難区域。多数の住民が避難を継続している状況下において、観光面がクローズアップされることは被災の当事者としては違和感がある。まずは、災害の記録を残すことに力を傾注すべきである。研究施設を造ってほしいというのが当事者としての想いである。

(中田委員)

- ・皆でいろいろと議論を進めながら、施設の機能を拡充させていくことを検討してもよい。施設を造るプロセスが地域再生に結びつけばよい。
- ・原子力発電所の誘致に至った社会構造や原子力災害が地域に何をもたらしたのかといったことを、社会科学的な視点で捉えることが重要である。
- ・継続して議論する場も必要である一方、その中に時間の緊急性をどのように取り込むかを考えることも必要であり、どのような時間感覚を持つかが重要である。
- ・双葉郡の復興に向けた努力を積極的に発信することも重要である。

(澤田委員)

- ・現に避難が継続している中で、施設の設置の是非を被災した当事者に考えてもらうことは無理であり、本来、当事者が前向きな気持ちになってから議論

を始めてもよいくらいのものである。しかし、議論を拙速に進めない一方で、準備を進めることは必要である。

- ・奥尻の事例であるが、被災者感情に配慮し被災の生々しさを排除した結果、後の世代になってから改めて追体験の場としての被災の生々しさが必要とされるような場合もある。工夫が必要である。
- ・防災に関する第一線級の若い研究者を育成するためには、拠点施設ができるとうありがたい。

(圖師委員)

- ・震災に関するデジタル情報は様々な機関で公表されているが、時間の経過に伴い、散逸してしまうものも多いように感じている。情報を後世にどのように継承するかが課題である。

(門脇委員)

- ・風評は人から人へと広がっていくものである。そのため、風評を収束させるには、正確な情報を持つ人をいかに増やしていくか、また、どのようにして正確な情報を周囲に積極的に発信してもらうかを考えることが重要である。

(小沢会長)

- ・確かに、正確な情報は伝わりにくい一方、不確かな情報や不安を持たせるような情報はすぐに広まる傾向が見られると思う。正確な情報の蓄積が重要である所以である。
- ・本日の議論の内容をとりまとめて各委員に提示し、次回の議論につなげたい。

7 その他

事務局から、次回会議の開催日時及び開催場所を伝達。

8 閉 会